

ある日から使えるようになった転移魔法が 万能で生きるのが楽しくなりました

まるせい



ファンタジア文庫

2921

まるせい

Martsei

画 イセ川ヤスタカ
Yasutaka Isegawa



ある日から使えるようになった
転移魔法
万能で生きるのが
楽になりました

The transfer magic
I got one day is all-round so it's fun to live.

口絵・本文イラスト イセ川ヤスタカ

プロローグ

違和感^{いわかん}で何となく目が覚める。

「……………なんだこれ？」

ベッドから起き上がると、目の前には青白い光の輪が見えた。

「テレビ消し忘れたっけ？」

光の輪の中に牢屋^{ろうや}のような場所があり、その先にはドアがあるようだ。

「えっと……明かり明かり……」

もう少しよく見ようと部屋の明かりを探して手を動かす。

蛍光灯^{けいこうとう}のスイッチは枕元^{まくらもと}に置いてあるので、すぐに見つかるはず。

「あった」

微かに届くその光を頼^{たよ}りに照明のボタンを探す。直ぐ^{すぐ}に見つけて押^おそうとしたところ

「えっ？」

スイッチに手が掛かった瞬間、青白く輝く輪の光が失われていく。失われた青白い光を求めて顔を上げてみると――

青白い光の輪は消えており、目に映るのはアパートに引越してきた時に買った中古のテレビだった。

半ば夢に浮かされたような、キツネにでも化かされた錯覚に陥ると、

「夢……だったのか……?」

首を傾げるのだった。

第一章 唐山悟の転移魔法

「ふあーあ」

大きな欠伸を漏らすと俺は目に溜まった涙を拭った。

教壇ではくたびれた白衣を纏った教授が授業をしている。

『～であるからして』

マイクから発せられる退屈極まるその声は、聞く者の集中力をこれでもかというぐらいに削り取る。事実、周囲にはまともに授業を聞いている人間は一人もいなかった。

「ね……眠い」

他の学生たちは思い思いに雑談をしたりゲームをしたり、はたまた雑誌を見ながらファッションの話をしている。

大学は勉強をする場所というイメージはもはや残っていないのだろう、俺も彼らにならい、適当にやり過ごしたところではあるのだがそうはいかずにノートを取る。

何故なら、この講義は試験の際にノートの持ち込みが許可されているからだ。

通常であれば、試験間近になれば友人なりサークルの先輩^{せんぱい}なりからノートや試験対策を教えてもらえるのが大学という場所らしい。

だが、俺には親しくしている友人もいなければ、バイトに明け暮れていてサークルに入っていない為^{ため}、試験の過去問を融通^{ゆうつう}してくれる先輩もない。

よって。頼れるのは自分だけとなり、こうして真面目^{まじめ}にノートを取るしかないのだった。

ガヤガヤと喧騒^{けんそう}が耳を打つ。ここは大学の食堂だ。俺はラーメンをのせたトレイを手に持ちながら空いている席を探していた。

「どこも満席か……」

厳密に言えば空席はある。だが、喋^{しゃべ}っている他の学生の荷物が置かれているのだ。

こういう場合、席は一人一席とルールで決まっているのだが、相手は陽の雰囲気^{ようふいき}を纏^{まと}って騒^{さわ}いでいる。

「……どうするかな？」

こうしている間にもラーメンが伸び^のてしまう。こんな時に友人がいれば席を確保した上で昼食を買いに行くのだが、あいにく親しくしてる友人はいない。

というのもガイダンスの際に隣^{となり}に声を掛けようかと思つたのだが、両隣^{りょうりん}がたまたま女子

だったので、声を掛けることができなかったのだ。

高校時代、女つ気の無い学生生活を送った俺には女に話し掛けるのはハードルが高かつた。そうこうしている間に周囲はR I N Eの交換^{こうかん}やら雑談を始めたので俺は完全に取り残されたのだ。

おかげで俺は友人を作ることができず、入学から1ヶ月^かが経^たつものにもかかわらず一人ぼっちだった。

「……ぬるくて不味^{まず}い」

しばらく食堂をウロウロしていたところ、ようやく空席を発見した。

だが、15分は経^たってしまったのでラーメンは伸び^のきっており、口の中でブツリと切れる。

「はあ……つまらないよな」

元々自分に自信があるタイプでもない。一念^{いちなん}発起^{はつし}して東京の大学を受験してみたが、入ってみて人との触れ合い方に躊躇^{ため}いが出る。

「このままずっとつまらない人生なのかなあ……」

俺はそう呟^{つぶや}くと、伸び^のきったラーメンをすすろのだった。

その日の晩。

バイトを終えて帰宅した俺は、普段通りにコンビニ飯を摂り、シャワーを浴びてベッドに横になった。

ぼんやりとテレビをつけて見ている。夜遅くということもあり、ニュースが流れているのだが、疲れているのか頭に入っていない。

今日は一日だるさが抜けず、頭が働かずにバイトでミスを繰り返してしまった俺だった。どうしてこんなに疲れているのか。俺はなんとなく頭の鈍りに意識を集中してみると

「えっ？」

きつかけはわからない。

今だと言えそうだし、もっと前……夢の……あの時に覚えた違和感が最初だろうか？

先程まで霧がかかっていたかのような感覚だったのだが、それが晴れたかのようにハッキリと理解する。

「なっ、なんだこれっ？」

身体の一部が新たに繋がったような。今まで意識していなかった器官が動いているような感覚に陥る。

「使える……の……か？」

どうすれば良いのかは何となくわかる。俺はその感覚に身を任せると――

涼しい風が肌を刺激する。違和感を覚えて足元を見ると、素足で土の上に立っていた。

「えっ、なんだこれっ？」

俺は混乱した。周囲を見渡すと明らかに様子が変わっていたからだ。

先程までポロアパートの部屋にいたはずなのだが、現在はベンチと自動販売機が目の前に見える。

「……………もしかして……公園……なのか？」

その場所に見覚えがあった。ここは近所の公園だった。現在住んでいるポロアパートから徒歩で数分。大学に通う際に毎日通っていた公園だ。

『さやはは、嘘ー、ほんとにー？』

声が聞こえたので咄嗟に隠れる。現在の俺はジャージ姿（それも高校の頃のダサイ）だ。

夜遅くに子どもが遊ぶような公園をジャージ姿で佇むのは怪しくて通報されかねない。
俺は電話で楽しそうに話しながら歩いていく女を自動販売機のかげから見送った。

「いつ、一体何が起きてるんだ？」

感覚に従って行動した結果、突然外にいた。それまでの記憶は継続してあることから夢遊病の類ではないだろう。

「と、とにかく一度アパートに戻らないとっ！」

戻りたいという焦りが湧き起こった。

次の瞬間、何かが身体を抜けていくと――

「えっ？」

目の前に青白い光の輪が現れた。

「俺の……部屋……」

その光の輪の先には俺が大学に入ってから暮らしている部屋が映っていた。



あれから1週間が過ぎた。

朝のニュースを見ながらトーストを齧る。時刻は既に9時を回っており、あと10分程で俺が履修している授業が始まる時間だ。

ここから大学までは5キロ程離れており、自転車を使ったところで15分は掛かる距離だ。

「へえー、あの芸能人結婚するんだ」

俺はトーストをもぐもぐと食べる。焼きたてのトーストにバターの香りが口の中に広がる。

映画の主演が発表されたように取材に応じる姿が映し出される。

俺はコーヒーを飲みきると。

「さてと」

荷物を手にする。そして――

「よし、そろそろ行くかな」

そう言っていると、次の瞬間景色が切り替わった。

「……こっちの部屋も汚いな」

別に自分の部屋をけなしているわけではない。一瞬(いつしゆん)の間に目の前の光景が大きく切り替わっただけだ。

先程までいたのが、テレビとベッドがあり、床(ゆか)に雑誌が散乱している俺の部屋だったのに対し、ここはいくつかの机に雑誌が散乱しており、壁(かべ)の本棚(ほんだな)には乱雑に本が入っている部屋だった。

「まあ、利用させてもらってる身だから文句は言えないけどな」

ここは部屋棟(まち)の一室。誰も利用していない部屋なので誰かに見られないか心配する必要がある。

「授業開始5分前。うん、余裕(よゆう)だな」

スマホを取り出して時計を見る。時刻は9時5分と表示されている。先程まで家でトーストを食べていたはずなのに、何故俺がここにいるかと言うと――

「おっと。早く行かないと席(せき)が埋(う)まっちゃうな」

できるだけ目立たないように端(は)の席を確保する為、俺は教室へと向かうのだった。

「……はあはあ、暑い」

大学でも体育の授業は存在する。俺が履修しているテニスの授業では、前日雨などが降

ってテニスコートが使えない場合、こうしてマラソンをさせられることがある。

「にしても……今日は暑すぎるだろ」

昼過ぎということもあり、太陽が爛々(らんらん)と輝いて肌を焼くうえ、風も一切吹かないのだ。

更に、ここは折り返し地点の山中なので自動販売機すらない。

周囲には俺と同じく、息を切らしている連中が倒れていた。

「喉(のど)渴(かわ)いた……」

中にはこの状況(じょうきょう)を予測していたのか、飲み物を持参している連中もいる。俺はそれを羨(うらや)ま

ましそうに見ていたのだが………。

「そっか……。できなくはないか?」

俺は人のいない場所に移動すると、

「上手(うま)くいけよ……」

小さく転移魔法(まほう)の入りを出現させ、出口を家の冷蔵庫に繋げる、そしてその中からよく冷えた飲み物を取り寄せると転移魔法を消した。

「ぶはっー! 生き返るわあ」

限界まで我慢(がまん)した上で喉を通る冷えた飲み物に俺は感動する。他の連中はこの炎天下(えんてんか)の中持ち運んだ為、すっかり温(ぬる)くなった飲み物で水分を補給しているのだ。

「後はこの暑さをもう少し何とかできればなあ……」

折り返しなので戻らなければならないのだが、こうも暑いと体力が回復しない。

「待てよ、これも何とかなるかも？」

俺は思い付いたことを早速行動に移す。

他の連中に見られないように木を背にする。そして木と背中の方に転移魔法の入り口を出現させ、その出口を大学の教室の冷房の吹き出し口にする。

「ううう、生き返る」

そうすると、俺の背中から涼しい風が流れてくる。その心地よさにしばらく身を委ねると、

「そろそろ戻ろうかな」

すっかり元気を取り戻した俺は、周りの人間が汗だくでぐったりしているのを尻目に軽い足取りで大学へと戻っていくのだった。

あの日。俺は、他人にはない特殊な能力があることを知った。

俺が得た能力。それはいわゆる転移魔法だった。

空間を超えて違う場所に到達する。窓や格子なんて意味を持たない。遠く離れた場所と

の距離をゼロにして瞬時に移動するのだ。

途方もない能力だった。

もし、俺の能力が世間にはれると大変なことになるだろう。色んな人間に注目され、平穏な人生を送ることはできなくなるだろう。そんなのは御免だ。

なので、とにかくこの秘密を漏らさない方が良いと思った俺は、自分の能力について人知れず研究を重ねた。

この能力には幾つか使い方ががある。

一つは自分がイメージした場所に瞬時に移動する能力。目覚めたばかりの頃に公園に一瞬で移動したのがこの力だ。これを【ワープ】と名付けた。

一つは青白い光の輪を広げて移動する能力。これを【ゲート】と名付けた。ゲートの力は俺だけではなく、他の生物なんかも一緒に移動することが可能だ。実験の為に猫を抱いて潜ってみたが、問題無く移動ができた。

その他にも様々なことがわかった。一度の転移魔法で移動できる距離はおおよそ50キロ。ゲートの大きさは自由に変えることができる。

同時に出来るゲートは全部で3つだが、目覚めた当初は一つだったことから今後が増える可能性はある。

人目に付かないように実験を繰り返した結果として俺は一つの結論を得る。
「この能力を上手く使えば今までより楽しく生活ができるんじゃないか？」
俺はこの転移魔法を有効に使う方法を考えるのだった。

翌日、能力の検証を終えた俺はある場所を訪れていた。その場所というのは、
「それじゃあこれが地図ね、蛍光ペンで塗りつぶしてある地区は投函しちゃう駄目な区域だから。マンションや一軒家に投函してきて」

目の前には紐で縛られたチラシの束がドンと置かれており、事務服を着た不愛想なOL
さんが説明をしている。

現在、俺が訪れているのはポスティング事務所である。

先日の話だが、たまたま見ていたバイト情報誌にチラシのポスティングのバイトが掲載
されていた。

何か転移魔法を生かした仕事が無いかと考えていた俺だったが、このバイトを見た瞬間
に天啓が舞い降りたのだ。

地図を見てみるとこの辺一体の地図に投函範囲が赤ペンで囲われている。この範囲であ
ればどこにばら撒いてきても良いらしい。

「わかりました。それじゃあ行つてきます」

そう言う俺はチラシの束を抱えて出て行くのだった。

大量のチラシを持った俺はまず、人目の付かない場所へと移動するとゲートを開いて自
分の家へと戻る。

「よし、早速配りに行くとするか」

そして、チラシを1束持つと地図を眺めた。

「まずは北西にするか」

北西に行くにはいくつもの入り組んだ道を通らなければならない。だが、この地区には
足を運ぶ価値がある。

「ここは戸数が多いから狙い目なんだよな」

事務所からの距離が遠くて配布の範囲の端なので、普通の考えなら、向かう時間を考え
ると手前の集合住宅地でチラシをばら撒く方が効率が良い。

だが、俺にとってはその程度の距離など大した問題ではない。

「早速、転移していくか」

なぜなら転移魔法があるからだ。

「まずは人気が無いことの確認だな」

そう言って俺はゲートを開く。

今回開くゲートはビー玉が通るぐらいの大きさだ。

これは突然ゲートを開いて向こう側に人がいたら大変なことになるからだ。

そうならないために、俺は予め街を回って人気の無い場所に目星をつけておいた。

マンシヨンの敷地にある非常時の物資を置く倉庫の裏手。当然、非常時以外は誰も近寄らない場所だ。

「ふーむ。見たところ誰もいなそうだな」

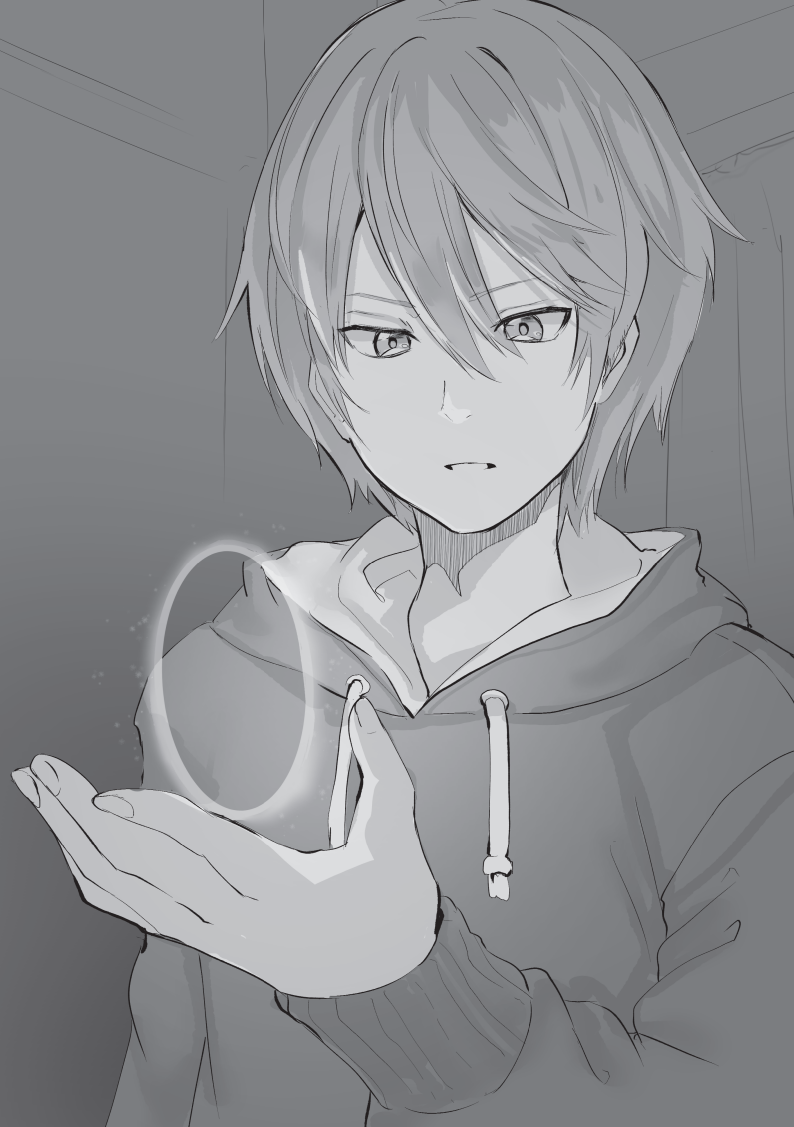
視界が動く。ゲートの出口側の位置を移動させて360度見渡しているからだ。

俺は転移魔法を使っていく内に、ゲートの大きさを自由自在に調整できるようになった。そして、ゲートの出口を自分の意思で動かすことで、人気が無いことを確認する。

この二つの転移魔法の応用で、俺は他人に気取られることなく転移魔法を使うことが可能になったのだ。

周囲に人気は無い。俺はチラシを手にとつと、ゲートを消し、今度は転移魔法を使って目的の場所へと飛んだ。

「よし。無事移動完了だ」



俺は何気ない顔をして建物の裏手から出ると、見上げ切れないばかりのタワーマンションが目に入る。

駅に直結しているので交通の便が良く、高層ともなると同じ高さに存在する建造物は数件のマンションの他はスカイタワーのみ。

そういった好条件のせいか、住める人間は限られているのか、集合ポストが設置されているのでポストイング効率が非常に良い。

マンションに入っていくと同業なのか、ポストイングをしている人がチラホラいる。この時間帯は買い物帰りの主婦がポストをチェックして回収していくのでチラシの効果が高いという話だからだろう。

俺は軽く頭を下げると俊敏な動きでポストイングしていく。ここまでで使った労力は転移による移動のみなので、体力があまり余っているのだ。

あつという間に手持ちのチラシを配り終える。追加分を取りにアパートに戻るべく、視線の死角を指すのだが。

先程挨拶をした人はいまだにチラシを入れている。大量に持ち運んでいる為、動作に手間が掛かるのだ。

その様を見ながら俺は建物のかげに移動すると、

「普通ならあのぐらい大変なんだろうな」

同業者への同情をするのだった。

俺がポストイングの仕事を見つけたのは偶然だった。

食堂で転移魔法を活かせる仕事を探していた時、アルバイト情報誌を落としてしまったのだ。

その時開いていたページに書かれていたのが。

『完全歩合制！ 空いた時間でOK！ 週1日から始められます』

ポストイングのバイト募集だった。

最初。俺は、労働者の金銭欲を煽るような文章が目が釘付けになった。こういうのは実態のない時給計算で労働者を安く酷使するのが目的なのだろう。

一旦はページをめくろうとした俺だったが、天啓が降りてくる。何故ならこのバイトは考えれば考えるほどに俺にぴったりだったからだ。

ポストイングで一番手間が掛かるのは考えるまでもなく移動時間である。何せ、重いチ

ラシを持ち歩かなければならないのだ。

体力も消費すれば、時間も浪費する。

通常、慣れた人間でも1時間で配れるのは数百枚程度。大型マンシヨンの集合ポストなどがある場所だと結構配れるようだが、この街の大型マンシヨンは遠い場所にしか無い。なので、労力のはとんどが移動時間ということになる。

一つのチラシ配りの仕事を終わらせるには早くても半日、普通の人間なら1日掛かる。慣れない人間や、チラシの配布範囲が一軒家ばかりだと2日掛かることも珍しくない。

だが、俺なら転移魔法を使うことでマンシヨンを自由に行き来することができる。必用な分のチラシだけを持って素早くポストイングをしては自分の家に次のチラシを取りに戻る。そうすれば、少ない労力で素早くポストイングを終えることが可能なのだ。

「だけどこのバイトをするには解決しなければならぬ問題があった」

それが、転移の際に誰かに見られては不味いということ。

「それもゲートで事前にそこに人がいないか確認することで解決した」

そんな訳で、転移魔法の利用も含めて効率が良かったのでやってみることにした。

「さて。それじゃあ次に配るチラシでも取りに行くか」

考えてみると、家に取りに戻れるというのは大きなメリットだ。

一枚が薄いとはいえ、チラシも紙でできている。一束にもなれば結構な重さになるのだ。俺は鼻歌を歌うと自分の家に転移するのだった。

「ただいま戻りました」

このバイトを始めてから1ヶ月が経過した。

「あらっ、いつも早いね」

事務所に戻るとOLさんが笑顔で出迎えてくれる。

最初は不愛想だったのだが、毎日仕事をこなしていく内に段々と認めてくれるようになったのだ。

「結構とばして帰ってきましたから」

「事故にだけは気をつけなさいよ」

俺はアリバイ工作の為に自転車を借り受けることにしていた。でなければ短時間で終わらせたことに疑問をもたれてしまうからだ。

「それにしても唐山君は優秀ね、発注元からの評判もいいわよ」

おかげで依頼が増えたとかなんとかでOLさんは嬉しそうだった。

「いつも思うんですけど。チラシ配りのバイトってチラシを捨てられたらどうするんです

か？」

俺はもちろんそんな不正はやっていないのだが、中には配るのが面倒で捨てている奴もいるんじゃないだろうか？

俺の当然の疑問にOLさんは――。

「唐山君はやってないだろうから説明してあげるけど、こっちで調査しているのよ。投函区域でチラシが出回ってなければ判るようになってるの」

何でもチラシのリターン率であったり、直接その区域の人間に確認したりと詳しい方法は秘密らしいのだが、判るようになってるらしい。

実際にこの事務所でも不正をしてクビになった人間もいるらしい。

「そうだ。これが今月の給料明細書ね、確認して」

OLさんから俺は給料明細書を受け取る。

「えっ？」

「ん、どうかした？」

俺の口から漏れた声にOLさんが反応する。

「これ………間違っていないですか？」

俺は焦りの色を浮かべると、自分の給料明細をOLさんに見せる。

「うーん。合っているわね」

だが、OLさんは特に気にすることなく当然のような態度をとる。

「だ、だって。明らかに多いですよ」

その金額は今までやっていたファミレスのバイトの2倍以上。下手すると新卒の初任給よりも多いんじゃないだろうか？

「いろんなチラシを毎日配ってくれているからね。うちも唐山君の働き目当てで仕事を受けてしまってる部分もあるから単価を上げておいたのよ」

なんでも、上司に掛け合ってくれたらしい。優秀な人材なので評価してあげて欲しいとおかげで想定を越す給料になったようだ。

「まあ、君は真面目だし仕事も丁寧だからね。事務所でも君を認めてる人は多いんだから、これからも頑張ってよね」

そういつてフランクに肩を叩かれた。

「あ、ありがとうございます」

俺は気恥ずかしい様子で返事をする。それというのも、この実績を残せたのは俺が転移魔法に目覚めたからだ。

もし、この力に目覚めることがなければ今頃はファミレスで皿洗いをしていただろう。
「その分、これからの働きにも期待してるってことなんだからね」

おかげで日常生活が楽しくなった。

「勿論です。これからも宜しくお願いします」

俺は転移魔法を覚えられた喜びを抑えきれずに満面の笑みで返事をするのだった。



「うあ……頭痛い」

俺はフラフラと道を歩いて帰宅していた。それというのも、本日バイトに向かったところ、顔色が悪いことを指摘されたからだ。

確かに数日前からどうにも体調が悪くなっているのを感じていたのだが、次々に入るバイトにかまかかって無視してしまっていたのだ。

ポステイングのバイトを何とか終えると時刻は夜を回っていた。途中でドラッグストアに立ち寄った俺は財布をポケットにしまおうとする。

ふと足元に何かが落ちた。

「つと、証明書落了ちしまった」

よろけた際にポケットから落ちたのはバイトで使っている身分証明書だ。これはポステイングをする際に、自分がどの事務所に所属しているかを示すもの。

中には変な客に絡まれたり、警察に職務質問される場合もあるので必須アイテムなのだ。既に財布はポケットの中。わざわざ取り出すのも億劫だった俺は上着にそれをしまった。

「それにしてもなんだこの痛み？」

身体^{からだ}の節々が痛む感覚なのに、いざ触れてみると感触^{かじよく}がない。まるで見えない血管が存在^あしてそこから痛みが発生しているような感じだ。

意識^{かす}が霞^{かす}む中歩いていると……………。

「ん？ こんな時間に女子高生？」

夜だというのにサングラスで目元を隠して帽子をかぶっている制服姿の女の子が歩いてくるのを発見した。

バツと見た感じだとスタイルが良く美人さんなのは間違いない。

「こんな時間にコンビニか？」

この辺りは人通りがそれ程多くなく、現在は俺と女子高生がいるだけ。そして歩いている直ぐそこにはコンビニがある。一瞬、自分が不審者に思われやしないかと考える。

すれ違いざまに見られたが、特に何事もなく通り過ぎる。

ふわりと柑橘系の良い香りがした。

何となく落ち着く匂いだった。俺は前を向き歩き出したのだが――

「えっ？」

目の前が眩しく光った。

遠くから何かが凄^{すごい}い速度で走ってくる。それを俺は慌^{あわ}てて横に避けるとその何かは物凄^{すごい}いスピードで走り抜けていった。

「嘘^{うそ}だろっ！」

俺の横を通り過ぎたのはトラックだった。それも運転手が居眠^{いねむ}りをしている姿がはつきりと見えた。

「あぶっ……………」

咄^{ちや}嗟^そのことで舌が回らない。警告しようにもその瞬間にもトラックは進んでいく。

トラックが向かう先には先程の女子高生。彼女は俺の声が聞こえたわけではないのだから、音に気付いて振り向いた。

「えっ？」

彼女の声がする。だが、トラックはすでに目前に迫っており今からの回避^{かいひ}は間に合わないだろう。

次の瞬間に彼女が撥ね飛ばされる。そう思ったのだが――



私がコンビニに買い物に行こうと歩いていると大学生らしき男の人とすれ違った。一瞬だけ目が合ったので警戒^{けいけい}をしたけど、どうやら顔色が優れないようだった。

目的地のコンビニの明かりが私を照らし、ほっと一息つくのも束^{つか}の間。背後によくない気配を感じ取った私が振り返ると――

眩しいばかりのヘッドライトが私を照らしていた。ソレは凄^{すごい}い速度で私との距離^{きょり}を詰めてきていた。

私は恐怖^{きょうふ}を感じたが声を出すことなく硬直^{こうちよく}してしまった。ソレの正体は居眠^{いねむ}り運転で突っ込んでくるトラックだった。

私は迫りくる衝撃^{しょうげき}に目をぎゅつと瞑^{つぶ}ると――

次の瞬間。何かに落ちるような感覚の後、暖かい何かに抱^だきとめられていた。

「えっ？ ええっ!？」

私は混乱している中、周囲に目を向ける。

そうするとまず目に入ったのは男の人の胸板^{むないた}だった。どうやら私をお姫様抱っこしてい

るらしく、目線が丁度鎖骨^{きこつ}に行く。

「……ふう、間に合った」

彼はそうつぶやくと遠くを見ていた。

そこではトラックがコンビニに突っ込んでいて、その音を聞きつけた近所の住人達が野次馬^{だじようふ}のように出てきている。

「おい、大丈夫か？」

男の人は私に話し掛けるのだけど、理解が追いつかない。

（トラックに撥ね飛ばされた私をこの人が受け止めてくれた？ それにしては衝撃がほとんど無かったし、トラックはコンビニに突っ込んでいるのだから撥ね飛ばされたのならコンビニの中のはず………だめだ……現状ではよくわからない）

私はとにかく助けてくれたであろう男の人にお礼だけでも言おうと思ったのだが……。

「この場合は緊急時だから仕方ないか……無理に転移魔法^{まほう}を使つたせい………頭痛^{びど}が酷^{ひど}くなってきた………」

などところを気にしていない様子だ。私は彼の思考が纏^{まと}まるまで口を挟^{はさ}まずに観察していたのだが……。

パチリと視線が合う。私はサングラスをしているので相手はわからないかもしれないが、

こちらから見れば完全に見つめあう形だ。

私はお礼を言わなければならないと思うのだが、異常事態に遭遇^{さうぐ}しているということもあり、頭が混乱して何を言えば良いのかわからなかった。

「駄目^{だめ}だ意識が………やばい、そんじやな」

その人は私を降ろすと左手で口元を押さえつつ右手を上げると次の瞬間消えていた。

「なんだったんだろ………？」

理解が追いつかない私を電話の着信音が引き戻^{もど}す。

『もしもし、湯^ゆ皆^{みな}？ 今ちよつと大丈夫？ 次の映画の撮影^{さつえい}の件についてなんだけど——』
相手はマネージャーだった。私は地面に落ちていたソレを拾い上げる。

『何、あんた外にいるの？ 何やらサイレンの音が聞こえてくるんだけどさ』

サイレンの音を耳にしたマネージャーから不機嫌^{ふきげん}な声が聞こえる。

「ええ、コンビニに行こうとしてたんですけど、コンビニにトラックが突っ込んでまして」
『はあっ！ それって事件じゃない。すぐにその場から離^{はな}れなさいよ。あんたは目立つのが仕事だけど、ギャラも無しでメディアに露出^{ろしゅつ}するのはNGだからね』

電話の向こうで捲^{まき}し立てるマネージャーに私は、

「日高^{ひだか}さん、一つ聞きたいんですけど」

「なに？」

「幽霊^{ゆうれい}って存在すると思います？」

そう言った私の手の中には1枚のプラスチックのカードが握^{にぎ}られていた。

第二章 異世界のケモミミ少女

「うう……頭^ががガンガンするぞ」

意識^がが覚醒^{かくせい}すると、猛烈^{もうれつ}な頭痛^ががした。

「なんでこんな状態^{じょうたい}に………??」

俺は二つの意味^{いみ}で呟^{つぶや}いた。

まず一つ目は。

「確か昨日は、バイトに行^いって何とか仕事を終わらせて、体調^{たいちょう}が悪^{わる}かったから帰宅^{きたく}して……」

意識^{いしき}が朦朧^{もうろう}としていたせいでよく思い出せない。

俺は自分の状態^{じょうたい}を調べてみる。服装^{ふそう}に関しては昨日^{けふ}日出掛^{でか}けた時のまま。そして近くにはドラッグストアの買^かい物袋^{ぶつふく}が落ちている。

恐^{おそ}らくだが、体調^{たいちょう}が悪^{わる}いなりに買^かい物^{ぶつ}をして家で安静^{せいじつ}にするつもりだったのだろう。

俺は周囲^{しゅうい}を見渡^{みわた}すと、石造^{いそく}りの壁^{かべ}の部屋^{へや}にいた。

ちなみにこれが俺が呟いた二つ目の理由だ。足元には魔法陣のような模様が描かれていて気持ちが悪くない。

俺は氣を失う直前がどうだったか思い出そうとするのだが……。

「記憶が無い……」

こうしているからにはワープを使ったのだと思う。

以前にも能力を使い慣れた頃、ちよつとした場所に寝ぼけて転移魔法を使用してしまうことがあった。

その時は大学であったり、アパートの風呂であったりと普段からよく使う場所に転移していたので、今回みたいに記憶と繋がらない場所に転移してしまったことに違和感を覚える。

「それにしても……」

こんな石造りの場所は見ることが無い。基本的に俺の転移魔法は一度行ったことがあるところにしか移動することはできないのだが……。

「ここは一体どこなんだ？」

見渡してみても見当がつかない。地下特有の重苦しく暗い雰囲気ジメツとした空気。

「……さてよ。見たことあるぞここ」

以前、能力が目覚めたきっかけとなった青白い光の輪。その先に確かにこの光景が広がっていた。

手掛かりとなるのはそのことだけ。依然、自分が置かれた状況は覚えてこない。

気がつけば喉がからからだった。この状況に緊張したのもそうだが、寝ている間に汗を掻き、水分が失われていたらしい。

「とりあえず水でも飲むか」

先日よりはましになっているが、まだ体調が良くない。動けない程ではないけど、安静にしていた方が無難だろう。

俺は買った物袋の中からペットボトルを取り出すと一口含む。そして気分を落ち着けると冷静に考えてみた。

「とりあえず、ここがどこかは知らないが、一度アパートに戻って休むとするか」

今はこの最悪な体調を整えるのが先決。そう判断した俺は転移魔法を発動させようとするのだが……。

——ガタンッ——

石造りの壁にはめ込まれた木の扉が開いた。

「あれ？ 誰かいるのです？」

可愛らしい声がして誰かが部屋へと入ってくる。

「えっ?」

現れたのは中学生ぐらゐの女の子だった。耳を覆うような長い金髪に金色の瞳。まだ美人と呼ぶには幼い容姿の割には一部が育っている。

「あなたは誰なのですか? どうやってそこに入ったのです?」

クリっとした瞳で格子越しに見上げてくる。

「あれ? もしかして言葉が通じてないのです?」

そう言って可愛らしく首を傾げる様子に。俺は完全に思考を奪われた。

「それでは、お茶をどうぞなのです」

あれから、牢屋のような場所から出してもらった俺は、彼女に促されるままに別室へと案内された。

かなり広い部屋に本棚が並んでおり、本が整頓されている。

読書用か物書き用なのか、テーブルの上には数冊の本が並んでおり、何かの作業中なのが窺える。

その他には目立った物はなく、部屋の隅にはベッドが一つ置かれているので、この部屋

は寝室も兼ねているということが理解できた。

「まずは自己紹介なのです。リリーはリリアナ・フォックスター。金 狐族の巫女なのです」

腰まで伸びた金髪に金色の瞳。金の刺繍がされた純白のローブは前でボタンを留められるタイプだが、見た目の幼さに反して成長した胸がこれでもかと主張をしている。

前開きしたローブの隙間からはスモークペーじュのスカートと黒のニーハイソックスが覗いており、艶めかしい健康そうな脚がよく見える。彼女は愛嬌のある顔立ちで、無垢な瞳を俺に向けてきた。

「俺はサトル・カラヤマだ」

一応この名乗り方で良いだろう。相手の名前からして異国を思わせる。ひとまず相手に合せておくのが無難だろう。

何とかその言葉を捻りだすのだが、俺は内心で混乱していた。

というのも、俺の視線は先程からある二点へと釘付けになっていたからだ。

「それで、どうしてあそこにいるのです? あそこは儀式場で鍵が掛かっていたのです。

普通は入れるはずなのですよ」

矢継ぎ早に発せられる質問に対しても俺は回答を持ち合わせていない。

「気付いたらいた」としか答えようがないからだ。

だが、俺はそんなことよりもどうしても聞いておかなければいけないことがある。

「その前に一つだけ聞かせて欲しいんだが」

彼女は「はいなのです」と聞き分けの良い返事をする。

俺の中で、まさかという思いと、そんなことはあり得ないという思いがぶつかる。

俺の視線がそっちに向き、彼女のそれがピクリと動きを見せる。俺は喉を一度ぐくりと鳴らすと彼女に対して決定的な一言を放った。

「……………その耳と尻尾って飾りだよな？」

「いいえ、本物なのですよ」

そう答えた彼女の頭部にはツンと尖った獣耳^{ケモノミミ}が。そして尻からはふさふさとした尻尾が生えていた。

「というわけで、昨日は体調が最悪で意識が朦朧としてたからわからないんだ。多分寝ぼけて入り込んだとしか」

リリアナの質問に俺は何とか答える。

記憶が曖昧^{あいまい}なのは間違いないので、素直に伝えることにした。

「……………ふむう、それは妙な話なのです。ここに入ってこられるはずが……。じゃあ次は……………」

そう言って尻尾を振りながらメモを取る。真面目な学生のようなだ。

「ちょっと待ってくれ」

「……………何なのです？」

続けて質問をしようとするリリアナに待ったをかける。

このままでは質問攻めにあってしまふ。

俺にしても聞きたいことは山ほどある。ここがどこなのかも知らないのだ。そんなわけ^で

「交互に質問をしていこう。お互いに知りたいこともあるだろうし、これなら公平^{こうへい}だろ？」
お互いに対等な関係であることを示すためにそう提案するのだった。

「それじゃあサトルさん、ご質問をどうぞなのです」

どうにか了承^{りょうしょう}を貰った俺は咳払い^{せきぱらい}をすると目の前の少女を見つめる。

「リリアナさんだっけ？」

この場所に着いてからお互いに自己紹介した時の名前を思い出す。

「呼び捨てでいいのです。多分、リリーの方が年下なのです」
「わかったリリアナ。じゃあ質問だ。ここは一体何処なんだ？」

恐らくは日本ではない、俺はじっとリリアナを見るとその獣耳を見つめる。

「ここはプリストン王国のお城なのです。その地下にある儀式場の手前にある図書室なのです。リリーの部屋でもあるのです」

「……………プリストン王国……城」

その単語に聞き覚えは無い。恐らくは海を渡ったのだと推測できるのだがそれでは計算が合わない。

能力の検証の結果だが、俺の転移には一度で移動できる距離に限界がある。流石に海を越える程の転移は不可能なのだ。

こうなると考えられるパターンは二つあるのだが……。

いずれにせよ聞いたことも無い国なのだ。これだけでは俺の推測を裏付けるには至らない。

何故なら、世界には俺の知らない国が存在しているかもしれないのだ。ここがそうだと
いう可能性は否定しきれない。

「次はリリーの番なのです」

次はどんな質問が来るのだろうか？

恐らく彼女は俺の素性を疑っているのだろう。城の地下、侵入するのは実質不可能な場所である。

そんな場所にいたのだ。恐らくは鋭い質問が飛んでくるのだろう。

リリアナは俺の側に置いてあるレジ袋を指さすと……。

「それ、何なのです？」

缶詰に興味を向けた。

「……これは缶詰だけど」

見たまんまの答えを言う。

「カンヅメ？」

耳がピクピクと好奇心で動く。

「この中には果物が皮が剥かれた状態で入ってるんだ」

ガサガサと袋から取り出してリリアナに渡すと。

「ほー、へえー、硬いのです」

感心して缶詰をくるくるとまわす。多分だが、家で食べようと思ってドラッグストアで買ったに違いない。

「食べてみるか？」

あまりにも無邪気な態度に俺の警戒心が緩むと。

「良いのですか？」

ケモミミがビヨコンと跳ねて返事をした。

「このぐらい別にたいした物じゃないし」

俺はプルタブを開けると缶詰の蓋を取り払う。

「凄いです。プシュっていったのです」

はしゃぐリリアナを見ていると可笑しくなってきた。

「フォークは無いし……箸は……」

レジ袋を漁るが見当たらない。

「食べて良いのです？」

「良いけど……」

流石に手で掴むのは不味いだろう。食器を貸してくれとお願いしようとする、

「甘いのです、そして美味しいのです」

リリアナは手掴みでそれを食べ始めた。

「こっちのこれは酸味が利いているのです。こっちはすごく甘いのです」

パイナップルや桃の果実を食べる度にリリアナの表情がコロコロ変わる。

ケモミミもプルプルと震えたかと思うとへによりんと伸びたり感情と完全に連動しているのが見て取れる。

「サトルさんは食べないのですか？」

途中でそんなことを聞いてくるのだが、腹を空かせた子どものような勢いなので手を出したらかじられそうだ。

「俺はいいよ」

反射的にそう答えていた。

「とても美味しかったですよ」

缶詰の中身を食べ終えて汁まで飲んだリリアナは、幸せそうな顔でぽつと中空を見ていた。

「えっと……次質問良いか？」

先程から何を聞くのか悩んでいた。どの質問も優先度が高く、判断するのに必要だったからだ。

「良いのですよ、何でも聞いてほしいのです、リリーは何でも答えるのですよ」
上機嫌に尻尾をフリフリさせるリリアナに俺は質問をした。

「その尻尾と耳^{みみ}って誰^{だれ}もが持つてるものなのか？」

偽^{いつはり}物ではないらしく、とても感情表現豊かに動き回っている。

もしこの姿がデフォルトだというのなら俺の推測が真実味を帯びるからだ。

「皆^{みな}ではないのです、リリーは金^{ゴールド}。狐^{キツネ}の血を引く獣人なのです。金狐族の希少な能力を持つているのです、えへんなのです」

そう言^いって誇^ほらしげに胸を張^はつてみせる。子どもが褒^ほめて欲^ほしそうに見栄を張^はっているように微笑^{ほほえ}ましく感じた。

「なるほど……ね」

俺はだんだんと自分の転移魔法^{まほう}がとんでもない方向に開花した事実^{じじつ}に気付^{きづ}き始めた。

獣人の存在。聞いたことの無い国名。そして能力。

いずれも生まれてこれまで聞いたことが無い。ある例外を除けばだが……。

「じゃあ次に聞きたいのだけど……」

「サトルさんずるいのです。次はリリーが質問する番なのですよ」

確かに連続で質問してしまつた。カードゲームもルールを守^{まも}つて楽しくプレイしようと
言^いわれている。

ここはルールに従^{したが}うべきだ。

「このカンヅメについてですけど、リリーの知識ではこんな保存の仕方聞いたこと無いのです、もしかしてサトルさんは異世界——」

リリーがカンヅメを突^つき付けて何かを聞こうとしていると——

「リリアナはいるかっ!!」

ドアが激^{いた}しく叩^{たた}かれた。

「大変なのです、ヴェルガーさんが来たのですよ」

「ヴェルガー?」

突然焦^{とつぜん}りだすリリアナに俺は聞き返す。

あたふたとしているリリアナ。

「こんなところ見つかつたら大変なのです。ああ……隠^{かく}れられる場所が無いのです」

そう言^いつて焦^こりながらも周囲を見渡^{みわた}す。ベッドの中は膨^{ふく}らみでバレるだろうし、本棚^{ほんだな}の

隙^{すき}間は入り口から丸見えだ。

この部屋で咄^{ちや}嗟^さに姿を隠^{かく}せる場所は無い。俺がそう判断していると——

「こうなつたら……」

リリアナは立ち上がると俺の手を引く。そして机の下の空きスペースへと俺を誘^{よう}導^{どう}する

と、

「えっ？ ちょっと！」

俺の抗議を聞かずに押し込まれる。そして俺の顔が柔らかい何かで挟み込まれる。

「どっ、どうぞなのですよっ！」

リリアナは椅子に座ると仕事をしているふりをして来客に呼びかけた。

乱暴にドアが開く音が聞こえる。そしてツカツカと歩く音が止まると、

「与えられた仕事は終わったのかリリアナ」

不機嫌そうな男の声が頭上より聞こえる。

その声にリリアナはビクリと反応したのか太ももがギュッと締められる。

「い、いいえなのです。これからやる場所なのです」

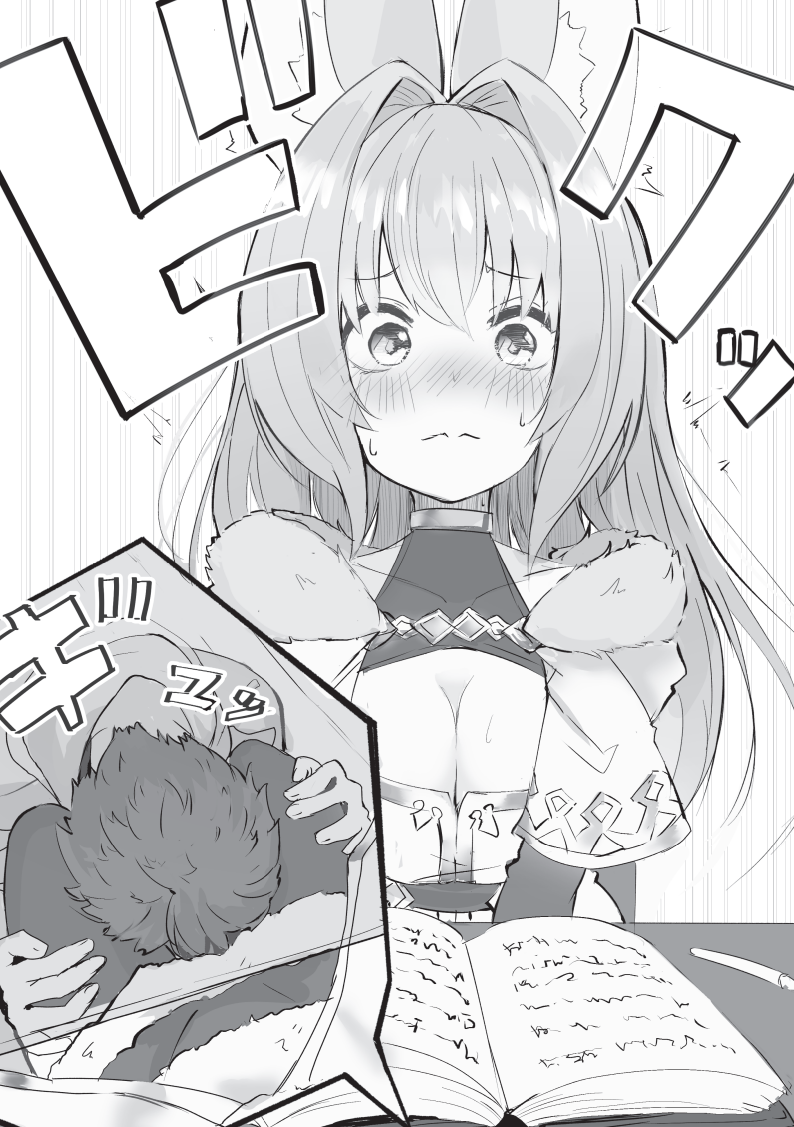
怯えているのかプルプルと震えている。視界に入らないが尻尾がわさわさと揺れている

心配がする。

「まだ終わっていないのかっ！ 遠征は3日後に迫っているのだぞ、貴様は国家に属する

意識が無いのか？」

怒鳴り声にビクリとして締め付けが強くなる、それと同時に俺の顔に何かを押付けられる。



「い、いえっ、決してそのようなことは無いのです。でも、殿下からは無理をしなくても良いと言われているのです」

太ももで完全に固定されて動くことができない。その上、現在俺の口と鼻は柔らかな何かに押し付けられているので呼吸ができなくなっている。

「なんだ貴様？ 殿下の名前を出せば俺がビビるとでも思ったか」

男の声が頭上から響く。俺は何とか少しでも酸素を取り込もうと口を動かすのだが………。

「ひゃっん！」

リリアナの声がした。妙に色っぽくて思考を奪われる声だ。

「何だその声は、馬鹿にしておるのか？」

俺はリリアナに気付いてほしくて両手を左右に移動させる。そして――

「んっくう……。い、いえ、決してそのようなことは――」

リリアナの太ももを叩く。そうすることで、挟み込んでいる太ももから解放されて、距離を取るためだ。だが……。

「――お、思って無いの、で、すよおおお――！」

逆に力が入り、俺の口と鼻はますます、柔らくも温かい何かに塞がれてしまう。

「だったら、すぐに作業にかかるんだな。一秒でも遅れたら酷いことになると思え」

頭上からはリリアナの艶っぽい、何かを堪えるような声が聞こえてくる。

だが、こちらも限界に近い。俺は最後の手段に出ることにした。

「わ、わかりましたなのです。早急に作業に――えっ？ ちよつと……」

焦る声のリリアナ。俺は布地に手を伸ばすと温かい物に触れた。

太ももを開かせることを諦めた俺は、リリアナの腹を押すことで物理的に距離を取ろうと考えたのだ。

リリアナは何かを堪えるように身体を丸める。そのせいで、柔らかな何か俺の手に覆いかぶさる。

「ハアハア。さ、早急に……作業させて……いただくのですよおおお」

俺は限界を超えると口と鼻両方が離れるように、藁にも縋る溺れ人の心境で両手に溢れる何かを掴むと――。

「ふにやあああ――ん」

リリアナの艶めかしい声が響き渡った。

「ぜえぜえ………死ぬかと思っただぞ」

ヴェルガーが出て行ったことで拘束が緩んだ俺は、何とかリリアナから距離をとると酸素を吸い込むことに成功したのだが……。

「はあはあ……サトルさん」

机から這い出してみれば憂いを帯びた視線でリリアナが俺を見ていた。

服は乱れており、呼吸をする度に実っているそのたわわな果実がポヨンと揺れる。潤んだ瞳に真っ赤に染まった頬。熱を帯びた艶やかな吐息が俺に届くと。

「どうした？ 風邪でも引いたのか？」

レジ袋に風邪薬あつたつけ？

そんなことを考えるのだが……。

「ううう。あんなにあつちこち触られたの初めてなのです、責任取って欲しいのです」
リリアナはそう言うときつとした表情を作ると俺を睨みつけてきた。

「これ全部運ぶのか……？」

目の前に積まれた木箱は大小含めると全部で200個もある。

「はいなのです、3日後に始まる遠征の物資が入ってるのです。これを倉庫から馬車置き場まで運ぶのがリリーの仕事なのですよ」

全く動じることなく笑顔で返事をする。俺は試しに荷物を一つ持ってみるのだが……。

「これ一体、何キロあるんだよ……」

持てないことはない、スーバーで10キロの米袋を持って帰ったこともあるのだ。

だが、これは明らかにそれより重たかった。流石にこれはボスティングのバイトの比ではない。どうしようか悩んでいると……。

「それにしても本当に手伝ってくれるのです？ 結構重いのですよ？」

気が付けば横から覗きこんでくる。クリっとした瞳は穢れを知らず、俺が善意から申し出た提案を心の底から喜んでいるようにも見えた。

この期待の瞳を裏切ることはいらない……。

「ははは、余裕だつて。俺もバイトで力仕事には慣れてるからさ」

咄嗟に出てきた言葉で後には引けなくなった。

「そうですか、ではサトルさんはそちらの箱をお願いしますのです。リリーはこつちをやるのです」

リリアナが指差した先にあるのは俺が運ぶ物より一回り大きい木箱だった。

「あまり揺らさないようにお願いするのです」

持ち上げてバランスを取っているとリリアナが忠告してきた。

「もしかすると割れ物とか入っていたりするのか？」
 「中身は日持ちする食料なのです、軍用なので結構な量が入っているですよ」
 どうりで重いわけだ。平均的な大学生男子でも辛いのだ、背が低く若いリリアナではとてもとても――。

「では、リリーも……………えいつ！ なのです」

「は？ えっ……………」

俺は信じられない光景を目にしていた。背の低いリリアナが自分の身体よりも大きい木箱を軽々と持ち上げたのだ。

「さあ、数もあるのでさっさと片付けるですよ」

ケモミミが「このぐらいよゆう」とばかりにピコピコと動く。尻尾はバランスをとるためなのかフリフリと左右に揺れる。

俺は、一瞬その可愛い動きに見惚れたのだが、すぐに現実引き戻された。
 何故ならばリリアナが歩き出したからだ。

目的地は彼女しか知らないわけで、ここで見失うと俺は一人で知らない場所に放置されることになる。

軽やかに歩くりリアナを俺は必死に追いかけた。

「サトルさん、平気なのです？」

下から覗き込むようにリリアナは俺に話し掛けてくる。眼前に突き付けられたケモミミも心配してくれている気がする。

「……………ごめつ……………ちよつと……………待つて……………息整える……………から」

俺は時間を掛けて空気を吸い込み息を整えた。

「これ、本当にリリアナ一人でやるつもりだったのか？」

正直舐めていた。木箱は重い上に中の物が動く、重心が安定せず、持ち運ぶのに重さ以上に気を使わなければならない。

これをリリアナ一人に押し付けるとか虐めじゃないかと思うぞ。

「はいなのです、遠征は3日後からなので、明日中に運べれば問題ないですよ」

特に気負うことなく答える。

もしかして、この程度の仕事は慣れているということか？

「こっちの人って皆そんなに力持ちなのか？」

もしかするとこの世界の人間にとっては大した作業じゃないのかもしれない。それならば俺も男としてのプライドは保てる気がする。だが――。

「いえいえ。リリーが特別なのです」

どうやらリリアナが特別らしい。そうすると根拠もなしに仕事を振られたわけじゃないんだな。

俺は頼もしくも元氣いっぱいなりリアナを見ていると――。

「そんなことよりあと99往復なのです。さあさあはりきっていくのですよ」

そう言つて腕を引つ張られる。その無邪気な笑みに俺は抵抗する術が無かった。

「さあ、次なのですよ」

目の前には積み上げられた木箱があと198個もある。

俺達は倉庫から戻ると再び荷物の前に立つていた。

1個や2個ならばなんとかやり遂げられなくてもないが、残り99回となると冗談じゃない。ただでさえ体調が悪いのだ、高く積み上げられている荷物を見ると頭がくらくらしてくる。

俺は悩んだ末にカードを切ることにした。獣人に怪力。リリアナは俺の常識ではありえ

ない行動をとってきた。

それならば俺も奥の手を温存しなくても構わないだろう。

「リリアナ、全部の荷物をあつちに運べれば良いんだよな？」

「はいなのです。だから時間が掛かるのですよ」

掛かるのは時間だけではないと思うんだけど……。

台車も無しに10キロを超える荷物を離れた場所にある倉庫まで運ぶとか、普通に考えたら人数を動員してやる作業だぞ。

リリアナにさり気なく聞いたところ、増員はあり得ないとのこと。他の人間は遠征に向けて準備をしているらしい。

「ちょっと手を貸してもらえればすぐに終わらせられるんだけどいいかな？」

リリアナは俺の言葉に耳を傾けてきた。

「それで、一体どうするつもりなのですか？」

リリアナは大量に積まれた荷物を前に俺に質問してきた。

期待に胸膨らませて見上げられているので居心地が悪い。これでもし能力が発動しなかったらいい恥さらしである。

俺は決意をすると。

「こうするんだよ」

手を翳す。そうすると、俺達の目の前に青白い光の輪が現れ、その先に倉庫が見えた。
「な、なな、なんなのですっ!」

ケモミミがピンと立って尻尾の先も立っている。突然現れた光景に警戒心が高まったのか。

必死な形相で光の輪から距離をとった。

「これは俺の転移魔法だ」

「転移魔法っ!」

この現象を起こしたのが俺だとわかるとリリアナは驚いた声をあげる。
そして恐る恐るゲートの先を見ると。

「倉庫が見えるのですよっ!」

「ああ、空間を繋いだんだ。これなら大変な作業もすぐに終わるだろ?」

真剣にあの距離を往復するのはあり得ない。とっとと仕事を終わらせて休むに限る。

「すっ、凄いです……サトルさんは凄いですよっ!」

リリアナが感動した声をあげている。だが、体調を考えたところ、長時間は無理そうだ。
「とりあえず荷物をどんどん運ぼうか」

俺はそう言うのと作業を促すのだった。

「サトルさん、大きい荷物が通らないと思うのです」

しばらくするとリリアナが当然の疑問を口にした。先程まで通していたのは小さい箱だ。

これは俺が両手で持ち上げられる程度の大きさしか無いので今広げているゲートで通すことができる。

だが、残る99個の荷物は横幅が広くて今のゲートでは通すことができない。

「うん、だからここからはゲートを広げるよ」

俺は意識を集中するとゲートの入り口を広げる。普段は視線の確保のため、小さくすることはあるが、力をいれてやれば大きくすることもできるのだ。

以前、実験として人目に付かない場所でやってみたところ、30メートル程まで広げることができた。

今回はとりあえず荷物を運べるぐらいの大きさにしてみる。

「リリアナ、悪いけど荷物をどんどん向こうに運んでもらえないだろうか?」

通常のゲートと違い、これは維持するのに集中力がある。気を抜くと形が崩れるのだ。
「了解なのです。どんどん運ぶのです」

元気な返事をするリリアナは大きな荷物を持ち上げる。

「ゲートの光の輪には気を付けてな。ぶつかると箱が傷つくかもしれないから」
 通る前に注意をしておく。以前行つた実験で、ゲートの輪はどうなっているのか確認したことがある。

どうやら輪の部分はかなりしつかりしているようで。試しに鉄パイプでぶつ叩いてみたことがあるのだが、金属音がして跳ね返された。

そればかりか、殴った鉄パイプを見てみるとへこみが見つかった。恐らく、もつと強い力で叩けば折れていたに違いない。

強度的には金属よりも硬い。それがゲートの実験で分かった結果だった。

リリアナは俺の指示を聞くと次々に箱をゲートの向こう側へと運んでいく。

その時間は実に10分ほど。

すべての荷物を運び終えたリリアナから声が掛かると俺もゲートの向こうへと移動する。

そうすると、俺が通ると同時に出口は消滅した。

「あつという間に片付いたのです。サトルさん凄いです」

リリアナは嬉しそうに尻尾をパタパタさせると俺を称賛した。

「でも、こんな凄い能力をどうしてリリーの為に使ってくれたのですか？」

リリアナは首を傾げた。

「そりゃ、大変そうだったし、普通助けるだろ？」

女の子一人でやる仕事量じゃない。手伝わない方がおかしいのだ。

俺は正直な言葉を言ったのだが、リリアナは大きく目を見開く。

「……リリーは、こんなに優しくされたのは初めてなのですよ」

「そうなのか。まあ、俺にできることなら力を貸すからさ」

震えるリリアナに俺は慰めの言葉を掛ける。こんな言葉でリリアナの気分が上向くかはわからない。だが……。

「あ、ありがとうございますのです。サトルさん」

リリアナは顔を上げると目を潤ませて抱き着いてきた。

「お、おいっ！」

行動が読めなかったので驚く。リリアナの柔らかない感触が身体に触れる。直に感じる体温とリリアナの可愛らしい仕草に心臓がドキドキしはじめる。

嬉しそうに抱き着いてくるリリアナ。俺はそんなリリアナにどう反応して良いかわからなかった。

「おかしい。ゲートが出ない」

俺は自分の手を見つめると困惑を露わにする。

「ふむう、帰れないのです?」

あれからリリアナの部屋に戻ってきた俺達は、ようやく重要なことを話し合った。

俺は自分が異世界から来たことをリリアナに打ち明け、リリアナはそうだろうと思つていたと返してきた。

なんでも、先程見せた缶詰や俺の服装。その他諸々の言動でこちらの世界の人間ではないと判断したらしい。

過去にこの場所で転移魔法にまつわる伝承が残っていたらしく、そのことから異世界との繋がりに気付いたようだ。

そんな訳で、異世界間交流を果たした俺達は握手をしてお別れをしようとしたのだが……。

「おかしいな、来たからには帰れるはずんだけど……」

転移魔法を使う度に疲れが溜まっていくが、まだ少しはゲートを開く余力はある。実際、「ちょっと失礼」

俺は少し先にある花瓶の下にゲートを開くと出口を自分の目の前に持つてくる。

「できているのです」

花瓶は俺の眼前に落下していき地面に落ちそうなところでピタリと止まる。

「浮かんでいるのです」

リリアナが興奮気味にその様子を見ている。

「どうやってるのです?」

「ゲートを花瓶が通らない程度の大きさで展開してるんだ」

大きさを調整する訓練の過程で発見したのだが、物が通るよりも小さなゲートを開いておけばその上にあるものをその場で維持することができると。

「ふーむ、いつもは使える能力が使えない……妙なのです」

そう言うのと、リリアナはケモミミをピンと立てると目が金色に輝く。そして俺を見ると。

「わかりました! サトルさんの身体の魔力がうまく循環できてないのです」

聞き覚えのない単語が出てきた。

「魔力の循環?」

そうするとリリアナは指をピツと立てると説明を開始する。

「魔法を使うとき、魔法使いは体内に魔力を流すのですよ。そして魔力を消費して魔法を使うのです。だけど、体内からひねり出す魔力循環が下手だと魔法は威力が落ちたり、無

駄に魔力を消費することになるのです」

リリアナはじつくりと俺の身体を診察するように見ると。

「サトルさんは魔法を使い始めてそれ程経っていないようです。魔力の循環は使う際の調整が必要なのですよ」

「つまり。無駄に魔力を垂れ流してると？」

「恐らく、こちらの世界でする転移魔法に比べて、世界を渡る転移ともなると使う魔力が桁違いなのです。今のサトルさんではリミットを外すかして強引に使わないと異世界へのゲートは開けないはずなのです」

つまり、最近の体調不良の原因は転移魔法の使い過ぎによるものだったのだろう。

「しかし困ったな……」

そうなると帰れない。来ることはできたのだから理屈の上では帰れるはずなんだが、それも今の体調を回復させてからになる。

「サトルさんはお困りなのです？」

「ああ、魔力の循環を覚えようにも、これまで独学で手探りだったからな」

小説とかなら、異世界に行った時点で魔王を倒しに出掛けたり、現代知識を披露して無双するのだが、俺は元の世界に未練がある。

テレビやインターネット等の他に、ライトノベルや漫画などの娯楽もあるのだ。読みかけの漫画の続きも気になる。

それらを手放してまで異世界で生活する程に割り切ることではできなかった。

「ふむう、魔力循環のサポートならリリーができると思うのですよ」

悩む様子を見せていたリリアナだったが、しばらくして提案をしてくる。

「どうやるんだ？」

俺は藁にもすがる思いでリリアナに質問をする。

「リリー達金　狐の獣人は他人の魔力の流れをこの目で見る事ができるのです。そして自らの魔力を流し込むことで相手の魔力循環を狂わせたり整えたりすることもできるのです」

つまり、リリーの種族は魔法使いを相手にした時のエキスパートというわけか。相手に魔法を使わせることもできれば、使わせないこともできる。

「おおっ、助かるっ！」

何にせよ、今の状態をどうにかできるのならそれに越したことはない。

「俺はどうすればいい？」

提案に乗ることにして、早速指示を仰ぐ。

「そのベッドに横になるのですよ」

まずは診察だろうか、俺はリリアナが指差すベッドに横たわる。

その時気付いた。こは毎日リリアナが寝ているベッドなのだろう、先程抱き着かれた時も感じた、リリアナの匂いがあるので、妙にそわそわしてしまう。

「これでいいか？」

内心を悟られまいとリリアナに伺いをたてる。ところが……。

「よ、良いのです。つ、次は、こうしなければいけないのですよ」

リリアナは何やら頬を赤らめるとチラチラと俺を見る。そして「良しなのです」と頷くと。

ベッドへと潜り込んできた。

「今からリリーの魔力でサトルさんの魔力を整えるのです」

そう言つて抱き着いてきた。俺は思わぬ接触到に心臓が脈打つと。

「ど、どうして抱き着いてくるんだ？」

一緒に横になるだけでも心臓がドキドキしてるのに、こうまで密着されると不味い。俺は体温が急上昇するのを感じる。

俺の胸でリリアナの胸がギューと潰れる。胸元に感じる極上の柔らかさと熱いぐらいの

リリアナの体温。潤んだ瞳から目を離すことができない。

「み、密着している部分が多いほど調整にかかる時間が減るからなのですよ」

なるほど、そういうことだったのか。リリアナは恥ずかしいのか、短時間で治療をするつもりようだ。本人が俺を治すために必死なのだ、恥ずかしがっているのは失礼だろう。俺は反省をすると。

「俺は何か手伝うことは無いのか？」

自分にも何かできることは無いのか聞いてみる。もしかするとリリアナの負担を少しは軽くできるかもしれないからだ。

「サトルさんにできることは無いのです。リリーに任せて休むと良いのですよ」

どうやら無いらしい。もともと、魔法の知識が無いので当然と言えばその通りなのだが……。

しばらくすると、体内に、何か暖かいものが流れ込むような感覚がしてきた。これは普段転移魔法を使う際に意識している部分だ。恐らくはリリアナの言うところの『魔力循環の調整』をしてきているのだろう。

「なんか暖かくて気持ちいいな」

血管の上から極上のマッサージを施されている気分だ。身体のコリがほぐれて力が抜け

ていく。

「はいなのです、ちゃんとした調整は凄く気持ち良いものなのです。リリーは得意なのです」

誇らしげに返事をしたかと思えば、胸に顔をこすりつけてくる。リリアナの吐息が首筋にかかりくすぐったい。

次第に思考が揺らぎ始め、猛烈な眠気が襲ってくる。

俺は、その快楽とも言える誘いに抗うことができず。気が付けば意識を失っていた。

「キューキューキュー」

胸元でもぞもど何かが動くのを感じる。

いつの間にか眠ってしまったようで、何かが触れる感触で目が覚めた。

魔力循環の調整とやらが上手くいったのか。昨日に比べると格段に調子が良いのが分かる。

治してもらって初めて納得する。今までは小さなホースに強引に水を流し込んでいたような状態だったのだが、今は特大のホースに余裕をもって水を流せる。

体感的な感想だが、意識を向けてみると魔力の通り具合が確かに違うのだ。

「リリアナにお礼を言わなきゃな」

毛布の下でゴソゴソと動いている。まだ寝ているのだろうか？

俺は起こすべきか悩みながら毛布を取ると。

「何だこの可愛らしい生き物は」

俺の腹の上で身体を丸めるようにして眠るのは、尖った耳にフサフサした尻尾、背面は金色の毛で前面が銀色の毛で覆われたキツネだった。

よくSNSなんかでは北海道旅行に行った雪原で野生のキタキツネが目撃されて写真に収められて投稿されていたりするのだが、目の前のキツネはそれに比べて濃い毛色をしている。

こっちの世界特有の種なのかもしれないが、こんな間近にキツネが眠っているという状況に俺は並々ならぬ興味を抱いた。

「こいつ可愛いな」

急いで事は仕損ずる。がつついて触りにいったところ起こしてしまい逃げられる。

元の世界でも、野良猫が日向ぼっこをしていた際に触ろうとしたのだが、逃げられたことがある。

その時の経験を踏まえた上で、慎重に、優しく。

俺は震える手を押さえ込みながら徐々にそのキツネへと手を動かしていった。

「あつ、暖かい」

俺の全身を幸福感が押し包む。それはまるで、高級な絨毯をなぞった時のような感触。指にあたる毛並みはそれぞれが独立しているにもかかわらず、表面をなぞると滑らかな感触を持つ。

こいつの毛並みは滑らかであると同時に沈み込めば指を暖かく包んでくれる包容力も兼ね備えていた。

「もう少し大胆に行くか」

ゴクリと喉を鳴らす。触った時に耳がピクリと動いたのだが、どうやら警戒心が無いのか、すぐに元に戻った。

俺は思い切るとその手をキツネの頬へと寄せていく。

「おおっ。こも柔らかいんだな」

顔の毛並みもとても気持ちいい。背中とは違って滑らかでは無いものの、また違った柔らかさがあり俺を感動させてくれる。

夢中になっていると、キツネの鼻がヒクヒク動いて俺の掌の臭いを嗅ぐ。そして――。
「可愛すぎるぞこんちくしょう!」

臭いを嗅いだキツネが目元を緩ませるのがわかり、そして俺の手に頬をこすりつけてきたのだ。完全に気を許してくれているのか甘えてくる。

俺は左手でキツネの背中を撫でまわすと右手で喉をゴロゴロと鳴らすことにした。

『キューン。キューン。キュウウウウウン』

喉を鳴らすたびに甘えた声をあげるキツネ。今がまさに至福の時。

胸に感じるキツネの体温。左手に感じる滑らかな感触。耳に入る心地よい甘え声。

細めた眉から金色の瞳が見える。興奮しているのだろうか？

アニマルセラピーというものにたいしてそれ程興味が無かった俺だったが、急速に理解する。

モフモフは世界を救うと。

世界中の心が荒んだ人たち。ペットを飼おう。モフモフさえあれば世界はこんなにも幸せに満ちているのだから。

しばらく撫でまわしていると、キツネから鳴き声が聞こえなくなった。どうやら気持ちよかったせいで再び寝てしまったらしい。

「そういえばお前ってどっちだ?」

以前、他人から聞いたことがある。動物には懐きやすい相性があるとか。人間にしろ何

にしろ、異性の方が懐きやすいらしい。

そう考えると初遭遇でこの懐き方は雌ではないかと推測が立つ。

俺はトリビアが真実なのが気になったのでキツネの脇に手を差し込んで持ち上げてる。

「ふーむ。ついてないってことはやっぱり雌だな」

そこには立派な玉袋が付いていなかった。トリビアはどうやら正しいらしい。

『キュキュ?』

撫でるのをやめたからか。持ち上げたからかキツネが目を覚ました。そして首を回して俺と自分の状況を確認すると。

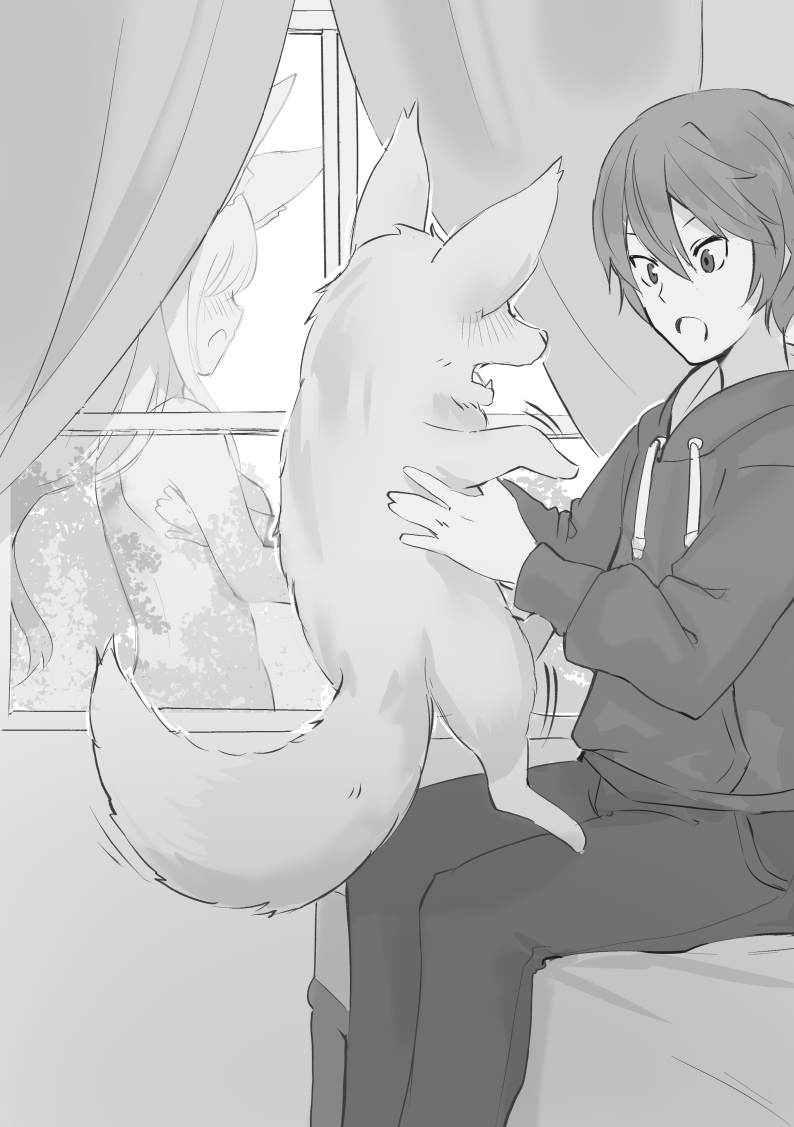
『キュキュキュ——!!』

「おっ、おいっ! 暴れるなよ」

突然ジタバタと身体をくねらせ尻尾を振り回す。そして——

「痛ってえっ!」

噛みつかれて手が離れる。そして落ちてきたキツネの可愛い肉球が顔面に迫る。その先端には可愛らしくない爪が装備されていた。



「ぎゃあああああああああああ」

「ううう……全部見られたのですう」

毛布を手繰り寄せて身体を覆っているリリアナは涙目になりながらケモミミを垂れさせた。

「いや、悪かったよ」

先程のキツネの正体が実はリリアナだった。

「だけど、まさかそんな状態になっちゃうなんて思ってたからさ」

おかげで無遠慮に身体中を撫でまわしてしまった。

「まさか、リリーよりも魔力が多いとは思わなかったのです。あの状態になるつもりはなかったのです」

なんでも、リリアナは魔力が尽きるとキツネの姿になってしまうらしい。

リリアナはこの世界ではトップクラスの魔力を保有しているため、まさか治療途中で魔力が尽きることになるとは思えなかったらしい。

結果として、キツネの姿になってしまい、気付かれないまま俺に撫でられていたというわけだ。

「でも、おかげで問題無く魔法を使えそうだぞ。ありがとうな」

恐らくは今すぐにでも転移魔法を使って帰ることもできるだろう。魔力の循環はこれまでもよりも数十倍効率がよくなっているようで、これならば異世界との往復も楽にできそう

だ。

「確かに、段違いなんです、そして恐ろしい程の魔力なのですよ」

リリアナは近寄ってくると俺の全身を金色の瞳で診始める。

余程集中して診ているせいなのか、毛布が少しずり落ちたことにも気付いていないのか、白い肌と谷間が見える。

「うん、大丈夫みたいなんです。また狂ったら治してあげるのですよ」

そう言っただけ満面の笑みを浮かべると。

「どうした？」

ボスリと胸に倒れてくる。

「今のでまた魔力を使ったのです。へとへとなのです」

どうやら無理をさせたらしい。

「ありがとうな」

俺はリリアナを抱き止めてやる。そうすると頭を傾けてきたので苦労つもりで撫でてや

るのだった。

「それじゃあ。そろそろ俺は戻るよ」

あれから結構な時間撫でてやった後、リリアナは名残惜しそうに身体を離れた。全身で感じていたリリアナの柔らかさがすつと消えると、俺にも何となく虚しさが残った。

「必ず。絶対。また来て欲しいのです」

その瞳は真剣で、リリアナは俺の上着の裾を引っ張ると上目遣いに見上げてきた。

「わかった。きつと来るよ」

絶対とは言えない。確実にこの世界に飛んで来られるかはわからないのだから。

「リリーの初めてを奪ったのです。責任取ってもらわなければ困るのですよ」

最後に胸に顔をうずめて何やらぼそぼそと言っている。顔が赤くて声も小さいのでよく聞き取れなかった。

俺はリリアナを引き離すと最後に頭を撫でて言った。

「きつとまた来るから、待っていてくれ」

続きは、12月20日発売のファンタジア文庫で！

©Marusei, Yasutaka Isegawa 2019